

■エピローグ■

殯（もがり）の実態を発掘調査の成果から検討した田中良之氏によると、日本書紀に記録される、数ヵ月から数年におよぶ皇族の殯は例外的で、通常の殯は、居住域や歌舞が可能なひらけた場所など、墳墓域ではない場所に殯屋（もがりや）を建てて、1週間から10数日にわたって行われる葬送儀礼だったようです。

千葉県石神（いしがみ）2号墳で出土した、立花（りっか）や、石製模造品に残るネズミのかじった痕や、愛媛県の葉佐池（はざいけ）古墳に代表される、遺体や副葬品に付着したハエのさなぎの痕跡などは、もがりの期間中に残されたものと考えられています。

また、本展で展示した枕は、どこで製作されたのか、具体的にわかっていませんが、石棺（せっかん）、埴輪、石製模造品などを製作していた集団が、それぞれの枕に関わっていたと考えられます。

枕を製作した集団の役割や、各製品の製作技術に関する研究が、日々進められています。

長い日本の歴史のなかで、古墳とともに登場し、そして消滅した死者のための枕は、古代日本の葬送儀礼を考えるうえで、きわめて重要な資料だといえるでしょう。